



古民家や伝統的な産業などを見ていると、日本では季節の変化が多様で、先人たちはその折々の状況をうまく活用して暮らしてきたことが分かります。近年のように秋が以前に比べて短くなってくると、生活の在り様も変化していくのでしょうか。「秋」は「とき」とも読み、とても重要な時期を指すようです。

越谷の学校を通して観た終戦前後

「市内小学校開校 150 周年記念展示 越谷から見た近代教育」の『第二部 終戦前後の学校』には多くの皆様にお出で頂きました。60 歳代以上の方が多かったのですが、青年層や壮年層の方も沢山見て下さり、また 20 歳未満の若い人々もこれまでより多くご来館いただきました。厚く御礼申し上げます。この展示の概要は次の通りです。

【序章】 教育に関する略年表（昭和初期～昭和22年）

【第一章】 戦時中の学校

- (1) 尋常高等小学校から国民学校へ……国民学校の教育の特質
- (2) 戦争末期の学校と子どもたち……『越ヶ谷国民学校 校務日誌』に記された空襲警報や勤労作業、イナゴ捕り、過酷な宿直勤務、教練、兵士見送り、村葬。『越ヶ谷高女』の学校生活。

【第二章】 終戦

- (1) 玉音放送……昭和20年8月15日の日記（作家・野口富士男、越ヶ谷高女の生徒）
- (2) 『越ヶ谷国民学校 校務日誌』に記された終戦直後の様子（荻島飛行場撤収、進駐軍、等）

【第三章】 混乱と生活の立て直し

- (1) 混乱……買い出し列車、墨塗り教科書、学校での相次ぐ盗難。
- (2) 教育の変革……新教育方針、米国教育使節団報告書、新制中学校の誕生。
- (3) 人間性回復を求めて……越ヶ谷文化連盟の活動、文芸誌「草笛」、戦後の学芸会。

【終章】 “明日” に向かって

越ヶ谷高等女学校の先生の問いかけ「君たちは どう生きる？」

実物史料の発する力

今回は越谷市立図書館・展示室での開催でしたので、多くの実物史料を見て頂くことができました。そしてこれらの史料から、とても強い印象を持たれた方が多かったことがアンケートからわかりました。その一部をご紹介します。

『越ヶ谷国民学校 校務日誌』より

- ★戦時中、男性教員の徴兵により女性教員が宿直をせざるを得なかった事は初めて知りました。当時も今も教員は大変だなと思います。
- ★校務日誌、村葬写真、など実物の資料から身近に感じられた。

終戦1か月前の記録

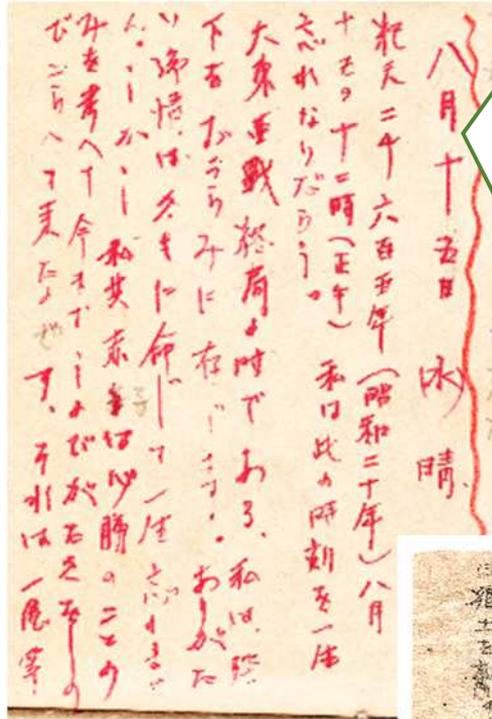
(『越ヶ谷国民学校 校務日誌』越ヶ谷小学校蔵)

勤労作業や空襲警報、女性の宿直などが記録されています。

事記	検印	事記	検印	出校	検印	七
一 警報発令 二 警報解除 三 勤務時間 四 宿直時間	長 直 宿 勤	一 助教講習 二 肉根 浅見 中村 石井 山崎 三 豊業 打金 四 荻島飛行場三回三回り発令セラレモ 五 何レモ29二概ニテ男常ナシ	長 直 宿 勤	一 初女以上荻島飛行場ニ勤労兼任 二 助教講習 三 肉根 浅見 中村 石井 山崎 四 豊業 打金 五 荻島飛行場三回三回り発令セラレモ 六 何レモ29二概ニテ男常ナシ	長 直 宿 勤	月十五日 日 曜 氣 象 曇 度 24

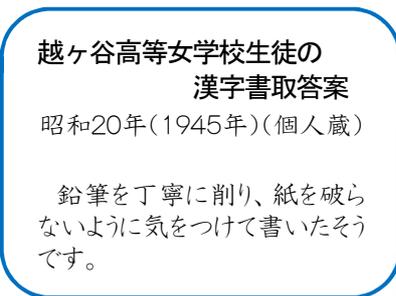
『越ヶ谷高等女学校生徒の通知表、漢字テスト、日記』より

- ★歴史として学んでいただけの戦争を身近に感じられた。特に8月15日の女学生の直筆の日記には胸を打たれた。
- ★わずか12歳の少女が終戦前後の日々に自分で体験したこと、考えたこと、正直な気持ちを書き綴っていて、グイグイ読まされました。
- ★普通の国民の日常の詳細や感情(多感な年頃、表に出せない心)までも目に浮かんできました。素晴らしい。
- ★女学生の日記、驚かされました。多勢の方に見ていただきたいと思いました。
- ★今こうしてアンケート書いている紙よりももっと弱い紙で勉強していたんだ・・・
- ★12歳の少女の日記には心打つものがありました。貴重な私物を貸してくださった方々、有難うございました。



越ヶ谷高等女学校1年生の日記
昭和20年(1945年)8月15日(個人蔵)

他のページは鉛筆で書かれていますが、このページの冒頭は赤ペンで記されています。この後には、最後の一人になるまで闘い続けるつもりだったこと、天皇の言葉は畏れ多いものだったこと、敗戦は自分たちの努力が不足していたことが一因だったこと、敵国への憎しみなどが、6ページにわたって記されています。



越ヶ谷高等女学校生徒の
漢字書取答案
昭和20年(1945年)(個人蔵)

鉛筆を丁寧に削り、紙を破らないように気をつけて書いたそうです。

若い世代が感じたこと

この展示は特に若い世代の方々に見ていただきたいと考えていました。その人々の感想をご紹介します。

- ★歴史の授業で学んだこと以外のことを多く知れた。(10歳代後半)
- ★学校で戦争を知識として学び理解していたが、実物を見ることでより深い学びになりました。(10歳代後半)
- ★戦争前後のことをあまり知らないの、資料を見て知ることが出来て良かった。当時のことを知らない世代が生きる時代になってきているからこそ、知ることがとても大切なことだと思いました。(30歳代後半)
- ★大きな展示などではほとんど見られない地元の特化した内容で、戦時中のことがより自分の身近なものとして頭に入ってきました。(20歳前後)
- ★一生懸命、勉強しようと思った。(小学生)

若い世代の皆さんもしっかりと受け止めてくださったようです。小学生の文、資料のどこからそう思ったのか聞きたかったですね。『校務日誌』や『女学生史料』を見て、「自分もしっかり生きなくちゃ」と思ってくれたのかもかもしれません。次号では別のご感想をご紹介します。

古民家での職業体験

中学生社会体験チャレンジ事業の活動で、南中学校2年生5人が大間野町旧中村家住宅で、先月13、14日に職業体験をしました。これは中学校でのキャリア教育の一環です。当館の施設管理、竈炊飯と古代の米の調理法、蚊帳と蚊遣り、働くことの意義などを学習しました。

事後に5人からいただいたお手紙には、丁寧なお礼と共に、古民家での仕事には管理の仕事と学芸員の仕事があることがわかったと書かれていました。